

武者小路公秀氏「社会科学への キリスト者の貢献」から

加山 久夫

本研究所が昨秋、武者小路公秀国際学部教授を講師としてお招きした公開講演会（1994年11月30日、横浜校舎）におけるご講演から筆者が特に深く印象づけられた二、三の点についてしるすことで、その要約の報告に代えさせていただきたいと思う。（講演内容は、いずれ研究所から刊行される予定の講演集に収められ、紹介されることになっている。）

国連大学副学長としてのご経験をはじめ、国際政治学や平和学の分野で広く国際的に活躍してこられた武者小路先生はローマ・カトリック教会に属すキリスト者として社会学者としての営みをしてこられた方でもある。

しかし、そのカトリシズムやキリスト教の見方はきわめて開かれたものであり、氏によれば、そもそもキリスト教そのものが超越的な視点を提供することによって、歴史や社会への開放的な視点を切り開くものなのである。このことから、筆者は、自己への絶えざる批判的な問いを要請し可能とする「プロテスタント原理」（パウル・ティリヒ）を想起する。

氏は、歴史的なキリスト教のなかにみられる弱さや欠けに、逆に強さが生まれる契機を見出すことができることを指摘される。他方、キリスト教（会）の強さと考えられていたものに負の方向が生じることもある。正統と異端の関係についても同様に言える。たとえば、中世教会の墮落が宗教改革を生み出したし、ルターの農民戦争への批判的態度にみられるような国家観は、われわれがこの世の歴史を考えるうえで国家や権力の問題を考える必要性を示唆してくれる。このように歴史には<よいもの>と<悪いもの>が固定化されたものとしてあるのではなく、<よいもの>の中に<悪いもの>が、<悪いもの>の中に<よいもの>がある可能性がある。歴史を相対化するこの視点は、いわゆる歴史相対主義と明確に区別されなければ

ならない。キリスト教の歴史観は根本的に終末論的である。そこから歴史へのこのような自由な見方が生まれるとともに、差別され抑圧されている者の側から歴史や社会を見る見方が提起される。

最後に、カトリシズムであれプロテスタントイズムであれ、これまでキリスト教という余りにも西方教会を中心として考えてきたが、東方のキリスト教（ギリシアやロシアなどの正教会）に学ぶことが必要ではないかという指摘は、重要である。西方教会のように強いミッションを感じさせないかもしれないが、よき証しを立てることによってキリストの福音（よきおとずれ）を伝播することの大切さである。このことは、わが国における、また明治学院におけるキリスト教の在り方を考える場合にも、大切なことを示唆してくれるのではないだろうか。

（かやま ひさお

所長、一般教育部教授）